アリスギアマガジン 読者参加型シナリオ

霞ヶ浦のサンセット

―アリス・ギア・アイギス外伝―

第五話「絵」

《「せっかくだから役になりきろう」とアドバイス》

◆学校の裏山

優陽　「ん～、そうだなぁ……いっそのこと、役になりきってみない？」

みちる　「役に、なりきる……？」

優陽　「うん！　みちるちゃん、声が小さいって気にしてるでしょ？　それはみちるちゃんだからだと思うんだ」

みちる　「えっ!?　私だから……？」

ドヤ顔で語る優陽だったが、その言葉はみちるを混乱させた。

優陽　「みちるちゃん、自分の声は小さいって思い込んじゃってるでしょ？だから自分以外になりきっちゃえばいいんだよ」

みちる　「だから、役になりきるってこと？」

優陽　「そう！　みちるちゃん……役名も同じくみちるちゃんだけど、この物

語のみちるちゃんになりきっちゃうんだよ！　笑って、怒って、泣いて、楽しむの！」

みちる　「この娘になりきる……？」

みちるは目を瞑って、自分のセリフを思い返してみた。

そこには、笑ったり怒ったり泣いたりする感情豊かなもう一人のみちるがいた。

優陽　「役になりきって自分と違う人になっちゃう。それが演じる面白さだよ！」

みちる　「……」

優陽　「急には難しいかもしれないけど、ちょっと考えてみて？」

みちる　「うん……」

優陽の言っている意味は分かる。
だけどまだ腑に落ちないみちるにとって、果たして優陽の言葉を理解できるのか不安でもあった。

澪音　「それじゃ、今日はここまでにしようか」

優陽とみちるのやり取りを伺っていた澪音は、空気を読んで一旦撮影を切り上げることにした。

優陽　「うん、わかった！」

みちる　「……」

少し離れた場所にいる澪音の声は鮮明でハッキリとみちるにも届いた。
みちるは演者でない澪音の声量にさえ敵わない自分がもどかしかった。

各々が帰り支度を進めている中、優陽はキョロキョロと辺りを見回していた。

優陽「あれ？　みちるちゃんは？」

泰介「もう帰ったみたいだぜ？」

優陽「えーっ!?　一緒に帰ろうと思ったのに～」

優陽が大口を開けて残念がっていると、今度は調がキョロキョロと辺りを見回していた。

調「……澪音もいないな」

優陽「えっ……!?」

優陽はもう一度キョロキョロと辺りを伺うが、確かにいつも一緒に帰っていた澪音の姿も見当たらなかった。

◆帰宅路

みちる　「……はぁ」

何故、声が出ないのか？
何故、固くなってしまうのか？
うまくやるためにはどうすれば良いのか？
一人で悶々と反省していると、後ろからよく知っている声に呼び止められた。

澪音　「みちる！」

反射的に振り返るみちる。
そこにいた声の主は澪音だった。

みちる　「あ、澪音……先輩」

みちるは呼び慣れた名前を呼ぼうとして、すぐに言い直した。

澪音　「いやー、みちるに先輩って呼ばれるのはくすぐったいよ。前みたいに『澪音ちゃん』でお願い！」

みちる　「あ、うん……」

照れているのか恐れ多いのか、もじもじとするみちる。

澪音のことは小さい頃からよく知っていて、優陽同様にお姉ちゃん的存在だった。

だけど中学生になって、同級生が上級生を先輩付けで呼んでいるのを見て、みちるは同じように振る舞わないといけないと思っていた。

けれど、優陽も澪音もそれを拒否するので、みちるはどうすればいいのか、何が正解なのか戸惑っていた。

澪音　「ねぇ、みちる。このあと少し時間ある？」

みちる　「え？　あります……あるけど……」

つい敬語になってしまう。

だけど澪音はそれを望んでいないと思い、みちるは言い直した。

澪音　「良かった！　それじゃ、ちょっと付き合って！」

澪音はみちるの手を握り、グイグイと引っ張って行く。

こうして澪音に引っ張られるのは小学生の時以来だと、みちるは少しだけ懐かしく感じていた。

◆部室

澪音に連れてこられたのは映研の部室の隣、旧美術準備室。
ここには映研の機材や小道具が置かれていた。

澪音　「……っと」

澪音は映研の機材であるＰＣに電源を入れると、その前にある椅子に座った。
しばらく待つとＰＣが立ち上がり、マウスを何度かクリックしてとあるファィルを再生した。

澪音　「恥ずかしいかもしれないけど、これ見て」

澪音は座っていた椅子から立ち上がり、みちるに座るように促す。

みちるは恐る恐る椅子に座ると、モニターに映っている映像を見た。
それと同時に、澪音はスピーカーの音量を上げた。

みちる　「あぅ……」

そこに映っていたのは演技している自分だった。
たどたどしくて、声が全く出ていなかった。
ここ数日、ずっと優陽達から言われている演技そのもの。
みちるは恥ずかしくて今すぐにも椅子から立ち上がりたくなる気持ちをグッと抑えて堪えた。

澪音　「どう?」

みちる　「どう……って、酷いです……」

その『酷い』という言葉には自分の演技を指すのはもちろんのこと、

この酷い演技をわざわざ自分に見せつけている澪音に対する想いもほんの少しだけ混ざっていた。

澪音　「ごめんね、みちる。いじめてるわけじゃないよ？　でもこういうのって、客観的に見ないと伝わらないからさ」

みちる　「……」

少なくとも、ここにいるのは二人だけでその他の部員はいない。
さらし者にされているわけではない。
そこには澪音なりの気遣いが存在していて、みちるはそれをわずかながらも理解していた。

みちる　「声も小さいし、全然感情がこもってない……さっき優陽ちゃんが言っていた通り……」

しばらく自分の拙い演技を見ていると、少しだけ客観的に眺める余裕が生まれてきた。

澪音　「感情がこもってないのはさ、この役を把握し切れていないからだと思うんだよね」

みちる　「……そう、なのかも……」

澪音　「そこでね、一つのアイディアがあるんだ」

澪音は人差し指を立てながら、得意顔を浮かべていた。

澪音　「確かみちる、絵が得意だったよね？　この役のイメージ、描いてみない？」

みちる　「え、どういうこと？」

澪音　「この優陽が考えた『みちる』って娘。いつもどんな服を着ていて、どんな表情で暮らしているのか？　想像してみて」

澪音は部屋に置いてあったスケッチブックと色鉛筆セットをみちるに渡した。

みちる　「あ……」

差し出された画材に、最初は戸惑っていたみちる。
しかし意を決したように受け取ると、真剣な表情で描き出した。

澪音　（そうそう。この真剣な表情。これがみちるだよね。おとなしいけど、ちょっぴり頑固な頑張り屋さん）

みちるはいつのまにか夢中になっていた。
まるで澪音の存在を忘れているように。

そしてしばらくして筆が止まった。

澪音「……できた？」

みちるはなにも言わずにコクンと頷く。
そして恐る恐る、描いた絵を澪音に見せた。

澪音「へぇ～、なるほど～！　みちるにとって、こんなイメージなんだ！」

そこに描かれていたのは、自分自身よりちょっときつめな表情を浮かべていたみちるだった。
マイクを持ち、力強く歌っている。
それは歌手になるという夢を持っている映画の中のみちるが、夢を叶えた後の絵だった。

みちる　「ち、違うかな……？」
澪音　「わたしが考えていたのと少しイメージが違うけど……ううん、こっちの方がしっくりくるかも！」

澪音はまさか夢を叶えた後の絵を描くとは思わなかった。
戸惑いながらも前向きな表情を描くとは思っていたが、想像以上の絵が出来上がったことに澪音は大満足だった。

みちる　「ほ、ほんとに？」
澪音　「ホントホント！　あ、今のみちるより少し髪が短いんだね」
みちる　「うん。壁を乗り越えた時に、少し髪を切るのかなって思って」
澪音　「ふふ。具体的にイメージできたみたいね」
みちる　「……うん」

少しはにかみながら頷くみちる。

みちる　「ありがとう、澪音ちゃん！　私、澪音ちゃん達の期待に応えられるように、頑張るね！」

澪音　「うん、期待してる！」

満面の笑顔を浮かべながら二人は美術準備室を後にした。

次の日、ほんの少し髪を切ったみちるがいた。

◆帰宅路

今日も撮影を終えて、三人が通学路を歩いていた。

優陽が中央を、その左右を澪音と調が横並びで歩いていた。

優陽　「今日のみちるちゃん、頑張ってたね！」
澪音　「根は頑張り屋だからね」
調　「あぁ。ついでに言えば、実は頑固でもある。だからこだわり出すと一気に伸びるタイプだ」
優陽　「うん。ちょっと恥ずかしがり屋で優しすぎるだけなんだよね。周りに気を遣い過ぎてさ」
調　「今日も先に帰っちゃったしな。私らにも気をつかっているのか」
優陽　「だよねー！　一緒に帰りたかったのに～」
澪音　「一人になって考えたいこともあるのかもね。だから無理強いもできないし」
優陽　「そうなんだよね……」
調　「みんな、優しすぎるよな」
優陽　「あははー」

話が一段落すると、優陽は突然真剣な表情を浮かべた。

澪音　「……優陽？」

調　「なんだ？　まだ悩み事があるのか？」

優陽が急におとなしくなったので、左右から二人が表情を覗き込んだ。

優陽　「うん、ちょっとね……」

優陽は顔を近づけてきた二人に向かって破顔する。

そして言うか言うまいか悩んでいたことを、覚悟を込めて口にした。

優陽　「脚本、今のままでいいのかなぁ、って」

澪音　「嫌ーっ！　ま、まさか書きなおしたいとか!?」

全部撮り直しになったら大ごとだと澪音が即反応し、頭を抱えた。

優陽　「書きなおしたい……っていうか、ちょっと書き足したいなって」
澪音　「足すならまだいいかぁ。スケジュールはピチピチだけど」

澪音は少しだけホッとするが、『ちょっと』がどのくらいなのか内心ハラハラしていた。

調　「どんなシーンを足したいんだ？」
優陽　「……撮影始まってから色々あったでしょ？　あたしがエミッション値が足りなくてアクトレスになれないとか、志保ちゃんが話していたようにアクトレスならではの苦悩とか、ずっとアクトレスはできないとか……」
調　「あぁ、なるほど。つまり、そういったマイナス面についても触れたいってことか」
澪音　「確かに今の脚本だと、優陽のアクトレス愛だけがギッシリ詰まっているからねー」

優陽　「だからね、そういったマイナス要素をうまく描ければ、もっと深いお話になるのかなぁって思ったんだ」

アクトレスになれずに落ち込んだ今の優陽だからこそ、辿り付いたアイディアなのかもしれない。

そう思った澪音と調に、否定する理由など何もなかった。

澪音　「うん、わたしも賛成！　スケジュールは考えずに、今の優陽だからこそ書けるアクトレス像を見てみたいな」

調　「あぁ、私達も手伝うよ。澪音さ、この前エミッション値を測った時にもらった事務所のパンフレットあったろ？」

澪音　「うん、貰ったね。あの適性検査もそこの事務所がスカウトを兼ねてやっていたみたいだし」

調　「ちょっと話を聞きに行ってみないか？」

優陽　「えっ？　しべちゃん、アクトレスになるの!?」

調　「いや、なるならないは一旦置いとくとしてだ。ただ生の声とか実際の雰囲気を感じる事ができるだろ？」

澪音　「なるほどねー。うん、いいよ。それで優陽のホンが良くなるならさ」

優陽　「ううっ……ありがとう、しべちゃん、澪音ちゃん……」

優陽自身、今から脚本に手を加えるのはスケジュールを破壊する行為だという自覚はあった。

それだけに二人が前向きに協力してくれることがとても嬉しかった。

優陽　「だけどさ、ただの冷やかしはダメだよ！　もしお話を聞いてアクトレスに魅力を感じたら、あたしに気をつかわずにアクトレスになってね！」

調　「あぁ、そうするよ。無事、土浦の志望校に受かったらな」

澪音　「優陽も一緒に通うんだからね！」

優陽　「ううっ……また墓穴を掘ったかも……」

すっかりと忘れていた受験勉強を思い出す優陽だった。

◆優陽の部屋

脚本を直したいと宣言してから初めての日曜日。

優陽　「う～」

優陽は朝から机に向かって唸っていた。

優陽　「大きな口叩いちゃったけど……はぁ……」

使い慣れたノートＰＣのカーソルは、一定の場所で点滅するだけで全く動こうとしない。

やりたいことは明確なのに、うまくストーリー展開に乗せられずに難儀していた。
今の脚本はテンポ感が抜群なだけに、変にエピソードを追加することでそのテンポ感が崩壊してしまう危険性があった。
その後もしばらく机に向かって唸り続けていた優陽だったが、午前から午後に変わろうとする頃に意を決して勢いよく立ち上がった。

優陽

「……うん！　気分転換しよう！」

ノートＰＣを閉じ、アイディアメモ用のノートと筆記用具をカバンに詰め込む。
そして外にある自転車に跨がり、ペダルに足を掛けた。
するとその瞬間、隣の家から薄らと声が聞こえてきた。

みちる

「あ～、え～、い～、お～、う～」

優陽　「……みちるちゃん？　発声練習してるんだ……」

風に乗って聞こえてくるその声は、優陽の心を震わせた。

優陽　「……あたしも頑張らないと！」

ペダルをグッと踏みしめ、優陽は勢いよく走り始めた！

◆霞ヶ浦ふれあいランド

霞ヶ浦ふれあいランドは霞ヶ浦湖畔にある施設で、農産物の直売所や水と触れあえる公園がある。

そして霞ヶ浦を一望できる展望台がランドマークとなっていた。

優陽　「……っしゃあ、やるかぁ！」

優陽は虹の塔と呼ばれる展望台の入口を前にして頬をパチンと叩き、気合いを入れた。

優陽　（澪音ちゃんやしべちゃんがわざわざアクトレス事務所に足を運んでいるんだもん、あたしもホンの修正、頑張らないと！）

展望台のエレベーターに一人乗り込み、拳をギュッと握った。

優陽　（主人公のアクトレス……つまりあたしが演じている役の娘が、ヴァイスに襲われていた女の子を助けるところから物語は始まって、二人は親友になる）

エレベーターから降りると、目の前に田園が広がった。

そして通路をぐるっと回っていくと、優陽にとっての原風景である霞ヶ浦が見えてきた。

優陽　（助けた女の子……みちるちゃんが演じる女の子は歌手を目指していて、自分で作曲もする。でもふとしたキッカケで、あたしが曲の詞を書くことになるんだよね）

しかし遠くには筑波山がどっしりと構え、手前でキラキラと輝く湖面は優陽のクリエイティブ心を十分に刺激していた。

優陽　（あたしはカッコいい歌になれば良いかなって思っていたけど……今はなんか違う気がしている）

３６０度の展望。

優陽はゆっくりと歩きながらアイディアを練っていく。

優陽　（アクトレスにも悩みや苦しみがある……当たり前のことなのに、あたしはアクトレスのキラキラしている所ばかり見ていて、そういうところを見ようとしなかった……）

優陽は志保との会話を思い出していた。

あっけらかんと話していた志保だったが、内心は相当ショックを受けていたはず。

優陽　（……）

志保だけではない。

あの人もそうだった。

きっと最初から最後までうまくいくアクトレスの方が少数なのかもしれない。

優陽は漠然とそんな思いを馳せていた。

優陽　（あまり暗い話にするのはあたしらしくないかもしれない。だけど、今のあたし……アクトレスになれない自分だからこそ書ける話があるような気がする……）

頭の中で何かがまとまりそうになる。
優陽が昨今味わってきた辛さ、苦しさ、切なさ……そういった感情は今だからこそ表現できるハズ！

優陽　（どうすれば彼女達の想いを表現できるんだろ？）

ボンヤリとエピソードが具現化していく。
しかし、なかなか具体的な展開へ昇華できずにいた。

そんなもどかしさを感じていたその時だった。

澪音　「優陽！」

優陽　「澪音ちゃん！　しべちゃん！」

二人が優陽の前に姿を現した。

それと同時に、優陽は窓から夕陽が差し込んできていることに気がついた。

優陽　「うわっ！　もうこんな時間なんだ!?」

調　「フフ、そんなに夢中になっていたのか」

澪音　「どう？　まとまった？」

優陽　「うーん……まとまりそうで、まとまってない、かな」

調　「あはは、全くもって予想通りだ」

澪音　「ホントだ。エレベータでしべが言った言葉そのままだね」

優陽　「うー」

自分のことを分かりすぎている親友二人に、優陽はちょっとだけ不満だった。

果たして自分はどこまで二人を分かってあげられているのだろうか？

優陽　「二人はどうだったの？」

澪音　「なかなか面白い話、聞けたよ！」

優陽　「ええ～、どんな!?」

調　「慌てるなって。それは少しずつ話していくとして、まずはなるほどと思った点が一つ」

優陽　「え、なになに!?」

もったい付けるように話す二人に、優陽は前のめりになっていた。

澪音　「アクトレス業界って女の子ばっかりと思っていたでしょ？」
優陽　「ええっ!?　まさか男の子のアクトレスもいるのっ!?」
澪音　「違う違う！　アクトレスは女の子だけ。だけど、上層部……確か、AEGisって言ったっけ？　そこには作戦を考えたりする偉い人がいて、結構男の人がいるらしいよ」
優陽　「AEGis!?　聞いたことある！　けど、AEGisってそんなところなんだ！」
調　「どんなところだと思ってたんだ？」
優陽　「えっと、なんて言うか、お仕事斡旋所みたいなところ？」
澪音　「まぁ、それもAEGisの業務の一つではあるけど、もっと大きい組織だよ。どっちかと言えば、行政機関って感じ」
優陽　「ぎょうせい？」
調　「この前、公民で習ったろ？」
優陽　「あ、そうだったね、えへへ……」
澪音　「大丈夫なの、本当に……」

頭をポリポリと掻いている優陽を見て、一緒の高校に通えるのか不安に思う二人。
だけど今はその話をする場面ではない。

調「とりあえず、AEGisを物語に絡ませるかどうかは割と大きいかなと思うわけさ。話は複雑になるかもしれないけど、奥行きはでるかなって思う」

優陽「なるほど……」

顎に手をあて再び考え始める優陽を、澪音と調は優しい笑顔で見守っていた。

◆職員室

優陽　「失礼します！　伊藤先生、今、大丈夫ですか？」

脚本修正はなんとか二日で終わらせることができたが、その脚本を実現するために、優陽は職員室へとやって来た。

菜澄那　「はい、なんでしょう、稲葉さん？」

優陽　「あの、映画の脚本を少し修正したんですが、そこに大人の男性役がどうしても必要になりまして……」

菜澄那　「あぁ、なるほど。それならうってつけの人がいるわよ？」

優陽　「えっ、本当ですか!?」

演者の相談に来るやいなや、即座に回答を貰えたことに驚く優陽。

人差し指を立てて得意げな表情を浮かべる顧問の菜澄那に、優陽の期

待感は最大限に膨れ上がっていた。

菜澄那　「体育の松井先生！」

優陽　「松井先生!?」

優陽にとって意外な人物だった。

男子の体育を担当している松井先生とはあまり絡んだことがなかった。

ただ遠目から見る限りでは熱血漢で、どちらかと言えば暑苦しい先生というネガティブなイメージだったので、本当に演技ができるのか不安でしかなかった。

菜澄那　「松井先生、学生時代に演劇をやっていたらしいの。最高の人材でしょ？」

優陽　「ええっ!?　本当ですか!?」

松井　「呼んだかっ!?」

自分の名前を耳にした噂の熱血漢がやって来た。
白いポロシャツが光を放っているような錯覚さえ覚える、一見爽やかだが間近に来ると暑苦しい太陽のような存在。
確か男子達の間で『太陽神』というあだ名で呼ばれていたのを思い出した。

優陽　「松井先生！　昔、演劇をしていたって本当ですか!?」
松井　「おう、本当だぞ！　『霞ヶ浦の優作』とはオレの事だ！　わっはっは！」

二つ名の意味がよく分からない優陽だったが、なにやら凄そうなものであることは理解できた。

優陽　「その『霞ヶ浦のユウサク』にお願いがあります！　あたし達の映画に

出演してもらえませんか!?」

松井　「くうっ……い、いいぞぉ！　出てやろうじゃないか！」

松井　（実際に『霞ヶ浦の優作』って他人から呼ばれたのは初めてだ！　こりゃ、気分がいいな！）

優陽の素直な性格がプラスに作用した瞬間だった。

二つ返事でＯＫが貰えたので、優陽は早速手にしていた脚本を松井に差し出した。

優陽　「本当ですか!?　ありがとうございます！　これが脚本です！　早速、明日からお願いできますか!?」

松井　「おう、いいとも！」

松井は爽やかな笑顔を浮かべながら、脚本を受け取った。

優陽は部室に戻り、澪音と調に松井のことを話した。
澪音は始め渋い顔を浮かべていたが、最後にはまあいいかと納得してくれたようだった。

澪音　（松井先生かぁ……暑苦しそうだなぁ……）

澪音の表情を見て、調はクスッと笑っていた。

◆映画研究部部室

松井を迎えての撮影初日。
AEGiS本部で司令官の松井と実行部隊長である優陽が作戦会議を行っているシーンの撮影が行われていた。

松井　「どう思う、稲葉……？」

優陽　「はい、明らかに動きが今までと変化しています。まるでこちらの思考を読んでいるかのように」

小道具のタブレットを見ながら二人は会話を進めていた。

もちろんタブレットには何も映っていないが、二人にはヴァイスの異様な動きが頭の中に浮かんでいた。

松井　「その通りだ。このままではこちらには勝ち目がない。ヤツラにとって不確定要素となるようなものが必要だ」

優陽　「不確定要素、ですか？」

松井　「これからそれを見つけなければならない。人類が勝利するために！」

優陽　「……はい！」

澪音　「カァット！　動画チェック！」

澪音の掛け声と共に、撮影部隊は動画チェックに入った。

調　「いやー、松井先生がフレームに入ると、一気に熱量が高まるな！」

澪音　「……平たく『暑苦しい』って言いなよ、しべ」

調　「あはは、そうとも言う。だけど、さすがに素晴らしい演技だよ」

澪音　「まぁ、そうとも言うけどね」

監督と副監督の目には、二人の掛け合いは文句の付けようがなかった。

一方、演者側も今の演技を振り返っていた。

優陽　「さすがですね、松井先生！」

松井　「稲葉もなかなか良い演技するじゃないか！」

優陽　「えへへ、そ、そうですかねぇ……」

優陽には未だに『霞ヶ浦のユウサク』の意味が分からずにいたが、松井の圧倒的な演技に尊敬の念を抱かずにいられなかった。

そんな松井から褒められて、優陽は素直に嬉しかった。

松井　「ところで……この脚本を書いたのは稲葉なんだよな？」

優陽　「はい、そうですけど……？」

それまで笑顔だった松井の表情が一変する。

途端に二人の間には緊張感が走った。

松井　「脚本を読んで感じたことがある。稲葉は、本当にアクトレスが好きなのか？」

優陽　「え……？」

松井　「どうなんだ？」

優陽　「……」

唐突な質問に、優陽は言葉を失った。

松井　「エミッション値が足りなかったんだよな、稲葉？」

優陽　「……ご存じだったんですね」

松井　「これでも一応教師だからな。だからアクトレスに対する複雑な想いがあるのは理解できる。だけどこの脚本からは、なんとも言えない陰を感じるんだ。間違っているか？」

それはまだ誰にも気づかれていない、優陽の奥底に存在する小さな闇を見抜く質問だった。

【選択】優陽が松井に対して答えた内容は？

《A　も、もちろん好きです》

《B　……わかりません》